

研究ノート

戦後新制高等学校応援団の草創期に関する一考察

金 塚 基¹⁾

A Study of Cheering Squads of High Schools in the Early Postwar Period

Motoi Kanatsuka¹⁾

要 約

本研究は、戦後の新制高等学校における草創期の応援団のあり方を明らかにする資料が乏しいため、それらが当時いかなる目的や経緯により開始されてきたのかを明らかにすることを目的とする。当時、生徒会役員から初代応援団長となったケースでは、当初の応援団の活動目的や原点が、学校の生徒集団間における組織的な行動のなかに含まれており、応援団の活動自体に目標や理念がおかれてはじめられたものではなかったという解釈を補強する知見が得られた。

キーワード：高等学校、応援団、草創期、団長

1. はじめに

今日まで、日本の学校の生徒（学生）における運動部の活躍を支持し、応援しようとする同学校の生徒たちのなかには、応援団といわれる他の生徒の応援行動を一斉的に統制・コントロールする役割を担おうとする特殊な集団が多々みられてきたといえる。

しかし、これらの応援団と呼ばれてきた生徒の集団は、自分たちが所属する同じ学校の生徒である選手の応援や彼らを応援する他の生徒たちの応援を、単に煽ろうとしているだけではないとみなされるのが一般的な見解であろう。つまり、彼らは集合的な応援活動を統制する役割を最大限に果たすために、関連する訓練や日常生活を通じて応援活動におけるリーダーとして一定の技量を鍛錬するものと捉えられている。

とくに、旧制中学の歴史を有する名門伝統校といわれるような高等学校においては、当然ながら各生徒たちの自校に対するアイデンティティが高まる傾向があるせいか、応援団といわれる部活動の存在や生徒会内に応援関連の委員会組織が位置づけられてきた学校も少なくない¹⁾。それらの組織集団に所属する生徒は、自校生徒の運動部や体育祭などで競技に参加する生徒の応援を集団的に高めるために、日々の鍛錬が前提となっていることが通例といえる。その鍛錬とは、直接的には応援活動時において他の生徒たちの応援を統制するための身体動作、発声方法、発話内容などが考えられる。しかし、その他の学校生活のなかでも、新入生オリエンテーションや各種行事における校歌斉唱、文化祭等の催しなどで何らかの特有な演技の披露や生徒集団の指導的な役割を担うケースがある²⁾。

1) 金塚 基 東京未来大学モチベーション行動科学部 (Tokyo Future University)

このような学校における応援団による応援活動のあり方は、日本以外の他の国々や文化圏における学校ではあまりみられないことから、独特な日本の学校文化の一端を形成してきたと考えられる。しかし一方で、日本文化圏に生きる人々の間においては、それに無自覚なレベルにまで応援団の存在は浸透してきたといっても過言とはいえない。つまり、それほど日本の学校生活においては、応援に勤しむような多くの機会があり、それらをリードするために応援団という何らかの役割を担う組織が存在することが慣例であったと察せられる。

ところで、旧制中学の生徒はほぼ全員が男子生徒であり、またバンカラと呼ばれる学校文化を受け継いできたためか、以前の高等学校の応援団の成員は男子生徒が中心であった。しかし、戦後から今日に至るまでの日本社会における性別区分の平準化の傾向などにより、高等学校においても男女共学化の波や女子応援団をモチーフにした漫画、映画などがヒット³⁾すると女子応援団員の割合が上昇し、近年では女子生徒のみの高等学校の応援団が散見されるようになっていく。また、応援団員による新入生オリエンテーションにおける校歌や応援歌の指導体制などに対しても、個人主義化やハラスメントの指摘が相次ぐなどの動向とともに、学校におけるこれまでの応援団の活動が衰退、あるいは変化する可能性が指摘されている⁴⁾。

つまり、時代や社会の変化とともに、学校の応援活動のあり方やその位置づけも変容していくものであるとすれば、戦後から今日に至るまでの間にあって、応援団の意味・役割についても既に何らかの変化が経られてきたはずである。また、今後の学校教育における応援活動のあり方や位置づけられ方、ひいてはその教育的意義や役割自体を予見することは、重要な意味をもつ。しかしながら、戦後間もない草創記の新制高等学校における応援活動をけん引してきたといえる応援団のあり方を考察できる資料が乏しいため、関連する先行研究もほぼ存在しない。

よって、本研究ノートでは、現在の高等学校にお

ける応援団の活動の意味・役割・位置づけのあり方を再考するための一助として、それらが戦後の草創期にいかなる目的や経緯により開始・展開されてきたのかを明らかにすることを目的としたい。なお、本稿ではそのため方法として、旧制中学の流れを有した伝統校といわれる新制高等学校における応援団出身者のヒアリングからその手がかりを得ることを意図するものである。

2. 戦前～戦後における高等学校応援団のあり方

戦後の高等学校の前身といえる学校種として最も代表的と考えられるのは、戦前の旧制中学であろう。旧制中学における応援団の活動については、各学校誌などに断片的な記述として散見されることがあるが、あまり頻繁にみられるものではない。というのも、旧制中学における応援団のなかで、校友会などの下で正規に組織化されているものはほぼ見当たらず、その多くが有志による応援団の活動として行われていたことによると考えられる。

そうした旧制中学等の応援団が、生徒会に紐づく委員会等の組織として位置づけられるようになったのは、戦後の新制高等学校の設立以降であるケースがほとんどであると考えられる。戦後の日本社会の民主化の流れのなかで、それまで学校長が統括する校友会は生徒の自治を理念とする生徒会となった。よって、生徒自身による自治的な活動が教育課程に含まれるようになったことで、応援団のあり方に関しても、その設置規程などのルールのなかに位置づけられることになったと考えられる。ゆえに、応援団の組織的な位置づけや団長の選出規程などに加えて、教育活動の一環として年間運営予算がつけられるなど、活動内容の目的や方針が明文化されるケースがみられるようになる。

また、応援時における応援活動の役割についても、戦前の「ヤジ隊」のような応援スタイルから、演舞やエール交歓などを取り入れて集団を統制する洗練された応援のスタイルへと変化がみられるように

なっただと考えられている⁵⁾。これらは戦後の関東6大学野球リーグ戦を通じた大学応援団の活動によるところが大きいといわれているが、そうした潮流が高等学校の応援団にも派生していったと考えられる⁶⁾。よって、当時の高等学校応援団たちが、他の生徒や教職員からどのようなまなごしを抱かれていたのかについては様々なケースがあったと推察されるが、少なくとも戦前の応援団のそれと比較すると、より正統性をもつ集団として位置づけられていったのではないだろうか。

さて、戦後の新制高等学校の教育課程に伴う応援団のあり方の変化において、当然、以上のような流れのケースには当てはまらず、戦前の応援団のあり方をそのまま踏襲する応援団や、そもそも応援団自体が創設されなかったという新制高等学校もあると考えられる。よって、戦後の高等学校の応援団がどのように位置づけられていたのかは一概にはいえない。

しかし、本研究ノートの意義は、応援団の活動が盛んな伝統校の応援団が、戦後の草創期にいかなる活動の役割意味を有してきたのかを探求することを通じて、今日の高等学校における応援活動自体の意味にアプローチすることでもある。したがって、そうした応援団の活動開始の契機として重要な始点と考えられる、戦後の設立草創期における団員生徒たちがどのような理念や目的をもっていかに活動していたのか。新制高等学校における草創期に応援団として活動した当事者からのヒアリングを手がかりとしたい。

3. ヒアリングの方法と回答内容の抽出

ヒアリング対象とした応援団出身者については、

旧制中学からの伝統を有する高等学校から、なるべく対象者に地域的な偏りがないことを意図して選定しながら依頼活動を行った。しかし、すでに高齢のため逝去されているケースが多く、結果として本稿では東北地域（仙台第二高等学校）、北関東地域（太田高等学校）、南関東地域（水海道第一高等学校）、山陰地域（米子東高等学校）の各高等学校における4名を対象とした（表1参照）。

よって、本稿は応援団の草創期に関する全国的な傾向を抽出するものではなく、あくまでも特定事例の考察に留められるものである。しかし、これまで複数の応援団出身者を対象としたヒアリングの報告自体がほぼ存在していないことから、戦後の新制高等学校における応援団の草創期の有り方に関する問題提起に一石を投げ得ると考える。

本ヒアリングに際して、対象者には「高校時代の応援団活動を振り返って」というテーマで依頼し、覚えていることをできるだけ事実即して語ってもらうことを目標とした。

なお、本研究ノートの目的は、旧制中学の歴史を有する草創期の新制高等学校において組織された応援団の当該学校における位置づけ、活動目的・内容、そして生徒・学校教職員からのまなごしの一端を明らかにしようとするものである。よって、ヒアリングの主な回答内容に抽出区分を設定し、1) 当時の応援団の組織的な位置づけ 2) 活動目的・内容・応援活動の様子、3) 周囲からの評価、4) 振り返った感想、と整理して抜粋する。

団長任期の世代に関しては、戦後新制高等学校になって以降の代を示しており、いずれの学校でも戦前の旧制中学の頃には応援団組織が存在しなかったわけではなく、各ヒアリングによればすべての対象

表1 ヒアリング対象者の出身高等学校・在学時期・応援団役割など

	出身高等学校	在学時期	応援団での役割	ヒアリング実施日
A	茨城県立水海道第一高等学校	昭和29～31年	初代団長	2020年4月9日
B	鳥取県立米子東高等学校	昭和27～29年	初代団長	2023年12月10日
C	宮城県立仙台第二高等学校	昭和30～32年	初代団長	2023年3月25日
D	群馬県立太田高等学校	昭和40～42年	第4代団長	2023年9月22日

校で存在していたとされる。しかし、冒頭に記述したように、戦前までの応援団と戦後の応援団の組織とは、その体制や活動の目的などの諸基準に、一定の区切りや変換があったからこそ、戦後に初代団長として位置づけられるようになったといえよう。それは本ヒアリングにおける仮説のひとつに含まれる。

4. ヒアリング該当回答ならびに考察

1) 当時の応援団の組織的な位置づけに関して（※下線部は執筆者によるもの・以下同様）

・回答該当部分

A：組織時の応援団員の人数は2年生を中心に全15人くらいではなかったかな。応援団員として特化するのではなく、資質的なことから弁論部のなかから何人かが兼務して応援の自発的に応援団をしていたように思う。積極的な志願者は少なかったので、自分がやると言えば応援団活動ができた。応援団組織における役割分担は、生徒会役員メンバーのなかから3年生の団長と2年生の副団長で担当した。そのほかの役割分担については記憶がない。

B：当初は生徒会の活動における臨時的な役割として開始された。それ以前は先輩のうちの有志が手旗をもって振って応援歌を歌って応援していた。甲子園に出そうになった際に、先生の方から生徒会にきちんとした応援団を組織したらどうかと言われたのがきっかけだったが、応援団の組織的な立てつけに関する規則などはつくらなかった。卒業生で同志社大学の応援副団長をしていた人をお願いして、生徒会役員3年生を中心に10人くらいの仲間が応援団リーダーに関する技術の特訓を受けた。翌年度にも生徒会3年生が中心となって応援団を結成したようだ。

C：以前は運動部からの有志により応援団が形成されていたが、自分の代の前に応援団規定がつくられて全校生徒の選挙により、自分は弁論部員として演説並びに発声を得意としており、また生徒会副会長

をしていたためか初代団長に選出された。応援団は生徒会とは別の組織として独立しており、団長の責任においてその他の団員（全20名ほど）を任命した。団長は団の内規や活動を規定することもできた。団長は他の生徒からの信頼獲得のため品行方正だけでなく学業成績も優秀であることが求められた。よって、自分が任命した団員達も知性派10名および肉体派10名という資質の生徒でバランスをとった。団員の役割区分は団長と幹事長くらいでその他の決まりはなかった。

D：以前の応援団は寄せ集めのような集団で存在していたようだが、ある時からきちんとした組織にすべきだと教員からの指摘がありクラブ化された。その後まもなく、クラブでは役不足であるとの応援団員からの主張で委員会に格上げされた。はっきりとした目的意識をもって応援団員になろうとした生徒はいないんじゃないかな。応援団のカッコよさや動きの美しさにひかれて入団したのが多いのではないだろうか。入部希望者は20人以上いて野球部希望者より多かった（練習が厳しくバタバタやめていった）。

・考察点

教員側からの助言などにより、学校の生徒会組織から派生して応援団の組織化が進められたケースが重複していること、また、それ以前の応援団とは自由な有志によるボランティアなものであり、組織としての位置づけがなされていなかったことがきっかけとなっていることが察せられる。応援団長に必要な資質についてはケースが分かれるが、少なくとも生徒のリーダーといえる生徒会役員であり、大勢の生徒の前で意思を伝達できる能力を有する生徒が担当するに至っていることが共通していたと考えられる。なお、応援団組織の内部における役割担当は至ってシンプルで、その後の応援団に多々みられるような細分化されたものはなかったようである。

2) 活動目的・内容・応援活動の様子など

・回答該当部分

A：特段の訓練のようなものはなかったが、応援歌および拍手（三々七拍子など）の指揮の際の演技の手ぶり身振りは先輩から教わった。また、発声練習は所属する弁論部の方でやっていたものを、掛け声など応援時の皆にアピールできるよう自分で工夫した。なお、新入生を対象にした校歌の指導や練習機会の記憶はなく、それは個人の自由であり強制ではなかった。学校の卒・入学式などの儀式や集会における校歌斉唱その他学校行事に応援部の役割の出番はなく、応援以外で応援団員が関与する地域での行事などはなかった。一方、スポーツ、特に野球では必ず活動役割があり、年2回の近隣高校との定期戦、3年に一度のファイヤーストームでは役割担当があった。応援時における特殊な服装や使用物としては、袴、高下駄、鉢巻きならびに学帽、応援旗を振っていた。また、エールや校歌・応援歌などに伴う演技としては、それぞれ演技が異なるので、全部で7～8種くらいかな。観戦応援者の人数は同校生徒と教職員ならびに保護者・OBその他を含め、スポーツの種類によって規模が違うが、野球・陸上大会などでは100人くらいはいた。

B：野球部・ボート部などの壮行会の応援活動や運動部の大会や試合が終わった後は、応援団としての練習をしたりすることはなかった。野球の大会前には放課後に全校生徒を運動場に集めて厳しく応援歌や応援の指導を行った。応援団員には役割などは細かく分かれておらず、皆が平等でサークルのような雰囲気でおおらかに活動していた。学生服、学帽、手旗、白手袋を用いたが、吹奏楽団が太鼓などをと演奏してくれた。演技の種類としては少なくとも3つ以上あり、応援歌の合間に披露した。野球部の最後の試合には全校生徒が観戦に行った。鳥取西高校も大学式の応援方法を同時期に実施していたので驚いた。

C：広瀬川の流れの音に負けないよう発声練習することによって声をつぶして「美声」を得ることを目標とさせていた。定期戦後は応援団の練習はなかった。翌年の4月から運動部の大会及び定期戦が合わるまでが練習を含めた活動はなにもなかった。自分は外部からの介入や仲間内での対立で生徒自治が困難になるため、団員の応援団としての政治的な活動は一切禁止していた。教員からも生徒の自治的活動の領域とみなして応援団への介入はほぼなかった。校歌や応援歌の練習は新入生を含む全校生徒で事前に実施した。一高との定期戦後や仮装大会後のファイヤーストームなど、団長の権限で年々ごとの変化があったと思う。応援時には団員は各自の手旗を用いていたが、受け継がれた大きな応援団旗も存在していた。応援歌に合わせてリズムに合わせて振っていたが、応援歌専用の演技はなかった。応援団員には専用の襟付きシャツのユニフォームを用いた。学帽やハチマキなどもしていたが、特段の決まりごとはなかった。太鼓も楽団もなかったが、甲子園に行ったときは尼崎高校の吹奏楽団にお願いして一緒に応援できた。

D：発声は腹から出して遠くまで通ることを目的に訓練する。体幹トレーニングなどの基礎練習で新入生の大半はやめていった。合宿の時にはたびたび先輩から夜中にたたき起こされて深夜トレーニングなどの特訓を受けることがあった。団旗は重かったので、絶えず持ち手の横に補佐をつけて万一に備えていた。応援歌はおそらく明治期からの古いものを踏襲していたが、演技に関しては戦後の3代目が6大学のものを見学し研究しながら作られた。野球場で応援活動をするとき観衆皆が応援団をみており、高校を代表するのが応援団員なのであるから、校則に定められた服装以外で応援することはまかりならないと思った。外見よりも発声や動きの技量によるインパクトの方が大きいので、動きにくい服装はむしろマイナスと考えていた。

・考察点

Dのケースを除き、応援団としての練習形態はあくまでも大会や定期戦などに対する準備として、臨時的なものとして位置づけられていることがわかる。また、応援団自身のみならず、他の生徒集団に対する応援活動への参加についても、個々の自由意思やペースが尊重されていたことが察せられる。一方、Dの場合には応援団は生徒会とは一定レベルで切り離されて、かつ、活動目標において応援リーダーとしての理想が追求されていることが察せられる。当該ケースのみ初代団長ではなく4代目団長であることから、すでに活動が蓄積され独自の変化を遂げはじめていることが要因だと考えられる。

3) 周囲からの評価に関して

・回答該当部分

A：一般の生徒たちの応援団員に対する印象は、スポーツには応援がつきもという程度の関心。私が団長をしている間は少なくとも「怖い」という印象はなかったと思う。また、地域においても北海道一校の応援団には特に関心ないようだった。周辺地域のエリート高校ではあったと思うが、応援団と地域との関係については特にこれといったものはない。校長先生や教職員は応援団員に対する印象としては、よく分からない。無関心だったのではないか。

B：他の生徒から応援団の活動は自然に受け入れられていたと思う。以前の先輩による有志の応援団の頃は、いかついバンカラ的な雰囲気 of 団員のイメージがあったが、我々の生徒会応援団メンバーはごく普通の一般的な生徒が応援団員をするという感じで特有な偏見等はまったくみられなかった。

C：当時は応援団員になることが名誉なことでやりたがる同級生は多く、今となってもなぜ推薦（任命）してくれなかったかと悔しがる人もいる。雨の中応援したら千人規模に応援が膨らんで逆転して慶応高校に勝ったので、応援にはそれほどの力がある。初

代団長が東北大法学部に進学したので、それ以降の団長も学業が重視されるようになったし、大勢の前での演説の力量も必要と思われていた。定期戦の時には近隣の女子高生も観戦に来てサインを求められることもあった。

D：応援団員が他校生徒とのいざこざから自校生徒の自衛役を担うような雰囲気もあったので、一時期印象が悪くなることもあった。応援時でもミスをするとバックヤードに連れていかれて暴力的な制裁をうけることもあったためか、部室で火事が起きた際も、応援団のタバコの火の不始末に違いないと疑われた。しかし、自分が団長の代では暴力沙汰はひとつもなく、喫煙や他の理由で停学や退学になった者はいなかった。高校総体での応援は、校内新聞に「見逃せない応援団の活躍」と題されて大きな写真が掲載された。近隣の高校から応援指導の依頼も来た。

・考察点

おそらく各対象者の学校では、以前の組織化されてない応援団による活動が行われてきたためか、他の生徒や教職員などから特別な印象や評価を受けてはおらず、学校生活に自然に溶け込んでいたことが察せられる。しかし、Dのケースでは応援団に対する印象には、暴力性と周囲からの評価の高さとの二面性が察せられる。応援団としての高い理想を追求する団の運営のあり方とそこに伴う排他性の側面とが顕在化した回答内容であると考えられる。

4) 振り返った感想

・回答該当部分

A：当時の応援団での応援活動を通じて得られたものとは、生徒会会長選挙に出て会長にはなれなかったが副会長に就き、同時に応援団長も担当したが、生徒会活動の一環だった。歌唱は音痴でスポーツはまるで駄目だったが、人前に出しゃばるのは好き、という私にとって応援団は居心地がよかった。自分の手の振り方に集団が揃えてくれた感動ということ

が、その後の人生にも影響した気がする。

B：もともと皆でなにか一緒に活動することが好きな性格であったので、応援団をやったことでより母校に対する思い強まったかもしれない。Uターンしてから同窓会長もしてきたが、応援団員出身者には同様の人もいる。応援団の応援をリードする活動自体は楽しくやりがいを感じた。

C：同窓会の副会長を長年務めており、そのために先輩諸氏からの依頼により毎月飛行機で関西から仙台まで通っていたこともあったけど、信頼を裏切るわけにはいけないからやり切ってきた。おそらく集団や人間関係を取り仕切ることが得意だと思われていたのだと思う。今の若い人たちは多様化とか言って団体行動を嫌うしコミュニケーションはメールを使うので、応援団の生徒の文化がなくなってしまうのも理解できる。しかし、いずれにせよ応援団のあり方やその存亡は団長の責任でありその資質によるところが非常に大きいものであったと思う。

D：応援団の演技は優れたものに昇華されたものであり、日本の応援文化を表象するものであるから今後とも将来的に継承され残されるべきと思う。

・考察点

対象者の振り返り的なコメントの共通点として、集団における活動や集団内の人間関係を結びつけることやリーダーとして集団形成していくような活動を好むことを前提とした発言の傾向があることが察せられる。また、そうした傾向は、高校に入学して応援団員の活動をする以前からの本人のパーソナリティ上の性質であることもうかがえる。そして、応援団の活動自体が他の生徒たちとは異なる特異な経験であり、そのことが以後の人生にも影響を与え続けていたと考えられる。しかし、Dの発話からは、応援団の演技自体に対する深い感銘がより大きなモチベーションのひとつとなり、現在に至る振り返りに

も通じていることが察せられる。

5. おわりに：考察のまとめと今後の課題

本研究ノートは、現在の高等学校における応援団の活動の意味・役割・位置づけのあり方を再考するための一助として、戦後の新制高等学校における草創期の応援団のあり方を明らかにする資料が乏しいため、それらが当時いかなる目的や経緯により開始されてきたのかを明らかにすることを目的とした。そのため方法としては、旧制中学の流れを有した伝統校といわれる新制高等学校で応援団に所属した当時の出身者からヒアリングにより、限定された対象者（4名）からではあるが、その手がかりを得ることを意図した。

本ヒアリング対象者から明らかになったことは、まず、戦後の草創期では生徒会を起点とした活動に位置づけられたかたちから、応援団の組織化が開始されたという点である。よって、生徒会役員あるいはそれに近い立場の生徒が、初代団長の役を務めるケースが多くなることが自然な流れといえる。そうであれば、それに紐づく応援団は学校生徒の代表としての役割意識やそれに即した活動目的・内容が理解されていたと考えられる。

それらに関連して、応援団の役割活動は年間を通して臨時的なものとなる傾向があり、運動部の大会や試合の前後までに集中していたこと、当初の活動の目的自体があくまでも応援リーダーとしての一般的な活動であったことが察せられた。一方、それ以上の応援団としての理想像を追求するヒアリング対象者からは、役割活動に没入していくケースがみられた。このことは、応援団に対する他の生徒や教員などの周囲からの評価にも関連があったとおもわれ、前者のケースでは特別な印象を持たれていない一方で、後者のケースでは何らかの偏見と高い評価とが混在していたことが察せられた。

そして、生徒会役員から初代応援団長となった対象者のケースでは、集団や人間関係自体を重んじる行動様式や価値観を有する傾向があることが推測さ

れたのであるが、このことは当初の応援団の活動目的や原点が、学校の生徒集団間における組織的な行動のなかに含まれており、応援団の活動自体に目標や理念を置いてはじめられたものではなかったという解釈を補強するものである。

以上、本ヒアリングによって明らかにされたことは、限定された特定の対象者による回答からの見解であるため、これらの是非の判断については同時代におけるより多くのヒアリング回答の結果が得られなければ確認されるところはないといえる。よって、今後の課題としては、さらにヒアリング回答者を増やしつつ情報を集積すること、また、それにより戦後草創期の高等学校応援団のあり方に関して、一定の類型化のモデルを構築していくことが適切であると考えられる。

注

- 1) 金塚基「日本の高等学校応援団の成立と活動に関する一考察」『東京未来大学研究紀要』Vol.10 2017 pp.198 - 199
- 2) 金塚基「地域文化の再生における高等学校応援団の活動の意義に関する一考察」『学習社会研究』第3巻 2019 pp.74-79
- 3) 小河久志「時代を映す鏡としての応援団」丹羽典夫編『応援の人類学』青弓社 2020 pp.184 - 188
- 4) 「校歌指導 教員が介入すべき」『朝日新聞』（埼玉版）2025年6月13日朝刊 13版
- 5) 「応援団「やじ隊」から組織に」『日本経済新聞』2023年1月23日夕刊 8版
- 6) 金塚基「高等学校応援団の儀礼的役割に関する一考察－学校行事との関連を通じて－」『比較文化研究』No.123 2016 p.30

(かなつか もとい)

【受理日 2025年11月19日】